

まじつらく

スクエア

小学校の先生が宿題を出してくれず、悩んだ両親がいた。以前の先生は出していた。お母さんは「子どもが宿題をしないというのはどうか」と思った。逆にお父さんは、学校で授業をして、家でも市販の教材をやり、私の塾でも学んでいるのに、宿題までするのはやりすぎではないかという。

「どうしましょう」と相談された。この場合、何が問題なのかを考えるより、何が必要かを考えるべきだろう。「何を子供に身につけさせたいのですか。勉強ですか、生活力ですか。単に勉強なら私の出る幕ではありませぬ」「自ら学ぼうとする力をつけさせたいなら、これは最高のチャンスです」と答えた。

宿題を決めるのは誰なのか、という視点が欠けているのではないか。先生？ 親？ どちらでもないのだ。ドリルは自習で行うのだから、本人が決めるべきである。

決定するのは子供自身

学校の宿題

ということ、本人に聞いてみる。「ドリルは家で何枚ならでできるの?」。本人いわく、「うーん、2枚かな。算数と国語1枚ずつ」。それを家ですること一件落着。

自ら学ぼうとする力をつけさせたいなら、まず、子供に決定権を与えるべきだ。それも、やる前提で任せること。やるかやらないか、ではなく、何枚ならできるか、を聞く。子供は、言ったことを必ずしも実行するとは限らない。でも、やることとする気持ちが大切なのだ。

周りの大人は、それが可能となるように援助しよう。その時、「あなたが言ったのでしよう」という言葉は決して使わないこと。自主性を育てるために、何ひとつプラスにならないから。

もし、先生が宿題をすんなり出していたら、このような問題は起こらなかつただろう。自主性が育つかもしいないチャンスは無かつただろう。よくよく考えれば、これはものすごく重要なことであり、実にもつたない話なのだ。

() すもすくーる園長 加藤義孝